

新琵琶湖博物館創造基本計画中間とりまとめ (平成25年(2013年)10月)

湖をめぐる博物館の「森」構想 ～博物館の「木」から地域の「森」へ～

琵琶湖・淀川流域から「湖と人間」を考える地域の人びとの誇りとなる博物館！

環境先進地域「関西」をリードする環境学習と情報の収集・発信の拠点

地域に根ざしながら広く世界を視野に入れた研究・交流のネットワーク施設

琵琶湖博物館は「リニューアルでこんな博物館をめざします！」

1 「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動する博物館

マザーレイク21計画の2つの柱である「琵琶湖流域生態系の保全・再生」、「暮らしと湖の関わり再生」の実現に向けて、琵琶湖の大切さに気づき、主体的な行動を起こす人びとを応援します。

2 次代を担う人が育つ拠点となる博物館

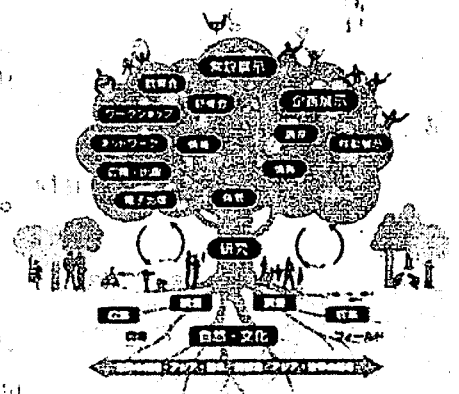
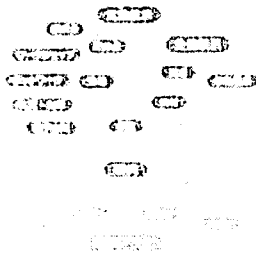
県民ニーズに応え、県政の課題や高度化・複雑化した情報をわかりやすく伝え、体験・交流の機会を数多く提供することで、湖と人間が共存する持続可能な社会の実現に向けた次代を担う人が育つ場となります。

3 地域活性化の核となる博物館

琵琶湖博物館は博物館であると同時に研究施設、文化施設、環境学習施設、観光施設という多面性を生かし、琵琶湖・滋賀を県内外に発信し、県のアイデンティティを高め、地域活性化の核となる施設をめざします。

<リニューアルでめざす新琵琶湖博物館> 親木となる琵琶湖博物館

展示交流空間の再構築を通じて、タイムリーでわかりやすい情報発信の機能を高め、より多くの人びとに琵琶湖博物館を利用してもらう。地域の人びと一人ひとりの心に「種子、挿し木、幼木」を渡していく博物館をめざす。



<将来的な地域の姿> 湖をめぐる博物館の「森」の誕生

琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしへの理解が深まり、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いた社会の実現。

【琵琶湖博物館17年の実績と課題およびリニューアルの方向性】

(1) 博物館の基礎機能

<実績と課題>

1) 研究・調査

- ・外部研究者や地域の人びとと協力して共同研究を85件、総合研究を10件行い、研究成果を専門誌等への論文として1,421件、一般向け誌面に1,826件公表。
- ・滋賀県でプランクトンや昆虫等50種の新種、152種の新記録種の生き物を発見。
- ・県政課題や県民ニーズの高い課題について研究を行い、成果を行政に提供。
- ・「湖と人間」のかかわりについて新たな考え方や理解が進展。

2) 展示

- ・企画展示を21回、ギャラリー展示を40回、地域の人びととの協働により開催。
- ・「湖と人間」のより良い共存関係を目指した、世界を視野に入れた意欲的な展示が好評を博し、これまでに800万人以上が来館。
- ・地域の人びととの協力関係が構築され、博物館活動の基盤が形成されてきた。

3) 交流

- ・市民参加型博物館として先駆的な活動を行ってきた「フィールドレポーター」や「はしかけ」制度は、他館のモデルとなり、国内で高く評価されている。
- ・近年、参加者に固定化傾向がみられ、だれもが気軽に参加でき、多様な関わり方で自らを発見し、実践できる新たな博物館の活用が求められている。
- ・環境への関心と問題解決能力を高め、持続可能な社会づくりに向けて主体的に実践できる人が育つ環境学習の拠点機能強化が必要となっている。

4) 資料

- ・累計85万点の標本・資料を収集し、データベース17分野、電子図鑑8分野を公開。
- ・琵琶湖博物館の活動や価値が認められ、多数の標本・資料を寄贈していただいた。
- ・交流や地域活動など多様な資料利用の要求に対応できる基盤が整う。



<リニューアルの方向性>

- これまでの研究・調査成果を、多くの人々が利用できる常設展示に活用する。
- 地域の人びととの協働を進め、参加型・体験型展示により、来館者にフィールドの魅力やおもしろさを伝え、地域での活動のきっかけを提供。
- 交流の場としての博物館から地域での実践を担う「人が育つ」博物館へ進化する。
- 琵琶湖地域の魅力を、実物資料をふんだんに使って展示・紹介するとともに収集資料の新たな活用を推進する。

(2) 博物館の多面的な機能

1) 教育・文化・観光施設として

- ・ 県内小学校の7割超が利用し、学習効果の高い施設として高い評価を受けている。
- ・ 社会教育施設として他府県・外国から多くの見学、視察、研修を受け入れ。
- ・ 観光施設として県内観光入込客数が22位であり、文化施設としてはトップ。



琵琶湖や環境に対する県民のよりどころ、関西の命の水を預かる琵琶湖の象徴施設として、琵琶湖博物館の存在感を県内外で高める。

2) 少子高齢化社会・成熟社会への対応施設として

- ・ 少子高齢化が進展し、生活中心・成熟の時代へと変化し、博物館の新たな利用ニーズが高まる。



昔懐かしい民俗資料等を活用した高齢者の癒しの場・元気を取り戻す場、高齢者と子どもたちの交流の場など、博物館の新しい活用のあり方を提示する。

3) 関西広域での環境学習・研究の拠点として

- ・ 環境に対する考え方や価値観が多様化し、新たな社会の動きとして広域的な環境保全の要請が高まる。
- ・ 関西の命の水を預かる滋賀県として、『飲水思源』の想いを下流府県の人びとと共有する必要がある。



琵琶湖・淀川流域における博物館ネットワークの拠点として、環境学習への取り組みや情報受発信力を強化する。

4) 国際研究・交流の拠点として

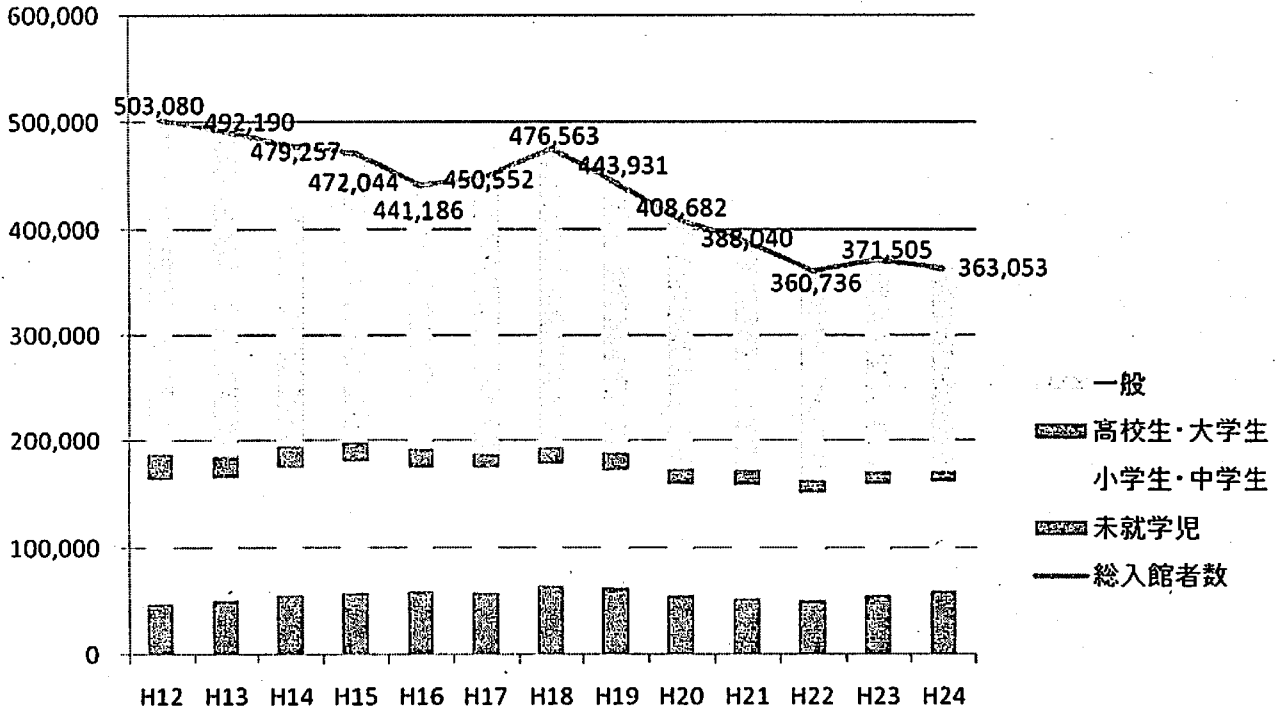
- ・ 開館以来、国際学芸員を擁する博物館として海外博物館との共同研究、海外学芸員の受入れ等国際的な研究活動を行ってきたが、今後一層の国際的展開が期待されている。



ILEC(国際湖沼環境委員会) や海外博物館等との連携を強化し、アジアをはじめとする世界の湖沼研究の窓口を目指す。

【来館者数の推移】

- 平成24年6月に来館者数800万人を達成。
- 地域に根ざした活動が深まり、広がりを見せる一方で、平成12年に50万人だった年間来館者数が平成24年度には36万人に減少している。
- 年間総来館者数の減少は「一般」(大人)の来館者の減少分とほぼ一致している。



【「湖と人間」の展示交流空間の再構築～新たなコンセプト】

高度化・複雑化した情報をわかりやすく、
タイムリーに伝える博物館

大人も日常的に楽しめる、
活用できる博物館

1 常設展示の再構築

体験的な展示を多く取り入れ、琵琶湖の魅力の発信力を強化

- ・ 発信力の高い展示
- ・ 県民ニーズ、最新課題に対応した展示
- ・ いつ来ても新鮮な展示
- ・ 参加型、体験型の展示
- ・ 地域の人びとと創り上げる展示

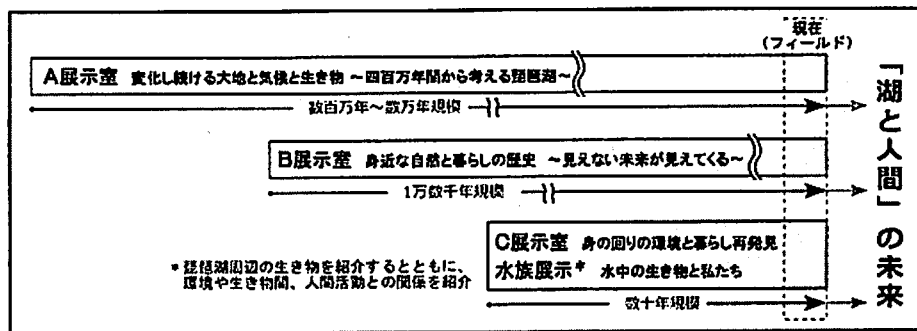
2 交流空間・交流機能の再構築

参加と発見、対話と交流を促し、次代を担う人が育つ交流の拠点

- ・ 学びと発見の体験交流
- ・ 実践へとつなぐ環境学習
- ・ 博物館と地域をつなぐ交流
- ・ 琵琶湖へ誘う屋外交流空間

＜展示ストーリー＞
「湖と人間」の未来を
考えることができる展示

琵琶湖の「現在」をとらえなおす3つの
時間スケールで、自然や人びとの暮らし
の変化、その関係性を伝える。
さらに、理解しようとする「現在」である
魅力あるフィールドへ誘う。



1 展示空間の再構築

①A展示室

＜現状＞ 古い時代から新しい時代にむかって琵琶湖の生い立ちを紹介

＜課題＞ 時間スケールが長いため過去に起こった出来事と現在の暮らしの関わりが意識しにくい
＜こう変わります＞ 生き物の進化や絶滅、大地と気候の変化など長い時間スケールにたつて初めて
見えてくる世界を紹介し、現在の暮らしとの関わりや未来を考える展示となる。

新テーマ：「変化し続ける大地と気候と生き物 ～四百万年間から考える琵琶湖～」

現在、未来の課題を考えるための過去400万年間を紹介する展示
現在から過去にさかのぼって、琵琶湖や生き物の変化をたどる
固有種・移入種、自然災害、気候変動など、現在の環境問題を改めて捉えなおすきっかけに

新しいコーナーイメージ



＜氷期の気候と森の探検コーナー＞

- 2.5万年前の寒い琵琶湖地域の気候(夏は19度、冬は-13度)を体感し、旧石器人も食べていた大型の松の実を森で探す、見て・ふれて・感じるコーナー
- 古代湖である琵琶湖だからこそ残された湖底の堆積物からわかる気候の変化から、温暖化問題を考える

＜地域の人びととつくる展示＞

- 身近な地域の魅力、様々な発見を、その素晴らしさを最も知っている、地域の人びととともに紹介する展示



＜古琵琶湖生き物コレクション＞

- 琵琶湖やその周辺に生息する動物の起源、ダイナミックな進化と絶滅を、巨大なゾウやワニの化石や骨格標本で紹介
- 過去におこった生き物の絶滅や移入のドラマを通して、現在の固有種や移入種の問題を考える

＜古琵琶湖のうつりかわり＞

- 日本一広い琵琶湖はいつからできたのか？また、近畿・東海地方との水系のつながりはどう変わっていったのか？災害をおこす地震などの地球の活動との関係とあわせて紹介

②B展示室

- <現状> 縄文時代以降の人間活動を中心に、湖と人間の関わりを歴史を生業、交通、漁撈、治水・利水等のテーマで展示
- <課題> 気候や地殻の変動など変化し続ける自然のなかで、人間が自然をどう認識し、どのように自然とかかわり暮らしを成り立たせてきたか、自然と人間のかかわりを提示する必要がある。
- <こう変わります> 歴史展示の中に環境を取り入れ、自然認識の変化に軸足を置くことにより、自然の変化と人びとの暮らしがどう結びついていたのかを示す展示となる。



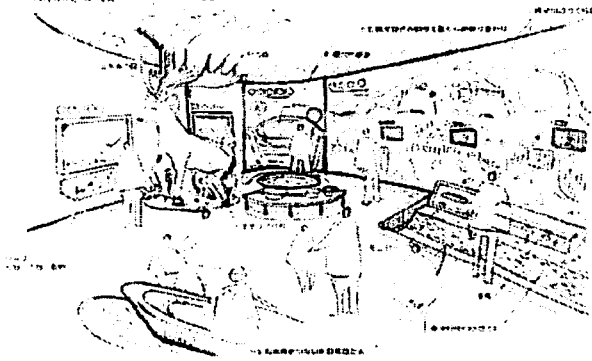
新テーマ：「身近な自然と暮らしの歴史 ～見えない未来が見えてくる～」

人が住むようになった時代の中で森林の変遷など身近な自然やその変化を取り上げ、環境学習にも活用できる歴史展示
複数のタイムスケールで歴史を眺めることで新たな発見があり、それにより今と未来を考える現在とは全く異なる自然のとらえ方があったことに気づく驚きの展示

新しいコーナーイメージ

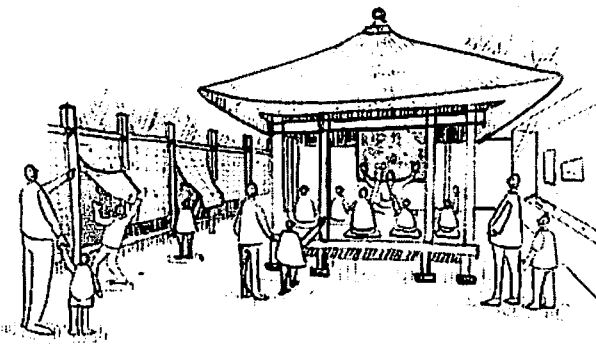
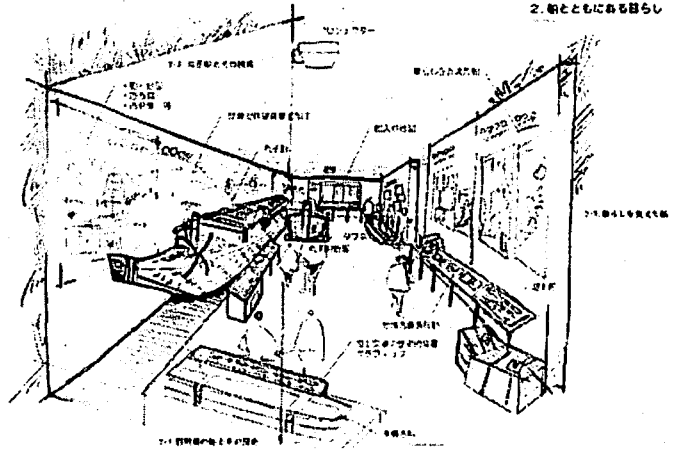
<かわる自然 かわる暮らし>

- 琵琶湖周辺の森林について、縄文時代や弥生時代などの人びとの利用による変化を紹介し、屋外展示にある森へと誘う。



<船とともにあった暮らし>

- 人びとが生活のために利用していた船が、簡単な形のものから、多くの荷を積み、湖上交通の主役になっていく変遷
- 船大工がするように船釘で板をはぎ合わせて作ってみる体験展示



<殺生をめぐる葛藤>

- 当時、人間を含めた生物が輪廻すると考えられていた六道をめぐる探検
- お堂を模した交流スポットで、中世の人になった気分で絵巻物などの解説をうける絵解き体験

<自然へのまなざし>

- 江戸時代のフナを描いた絵画やシーボルトが編集した動物誌『ファウナヤポニカ』の図などを見比べながら自分でフナをスケッチしてみる体験

③C展示室

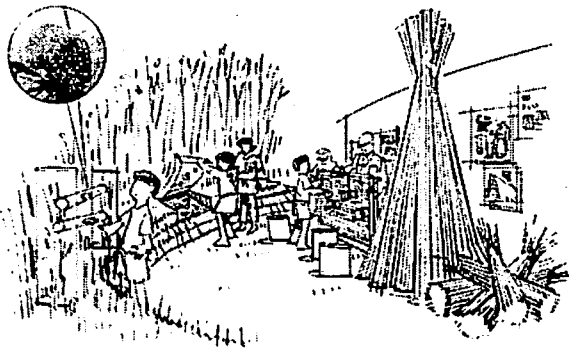
<現状> 多様なトピックを通し、主として昭和30年代以降の生活や生態系の変化を示した展示
<課題> トピックの関係性が分かりにくく、また、開館以降の研究成果や最新課題に対応できていない。
<こう変わります> 湖岸から森までのいくつかの場をとりあげ、環境、生き物、人間活動とそれらのかかわりを紹介することで、最新課題に対応し、来館者自らが琵琶湖や様々な環境とつながっていることを感じてもらう展示となる。



新テーマ：「琵琶湖地域のいま～身の回りの環境と暮らし再発見～」

ヨシ原、田んぼなどの身近な景観を入りに、その面白さや抱える問題などを多面的に紹介
新たな発見や課題、様々な地域活動、季節のフィールド情報などを随時更新
生き物展示の導入、交流コーナーの強化により、来館者の関心呼び覚ます
琵琶湖の情報や関西地方の中の琵琶湖を紹介し、琵琶湖を知らない地域の人びとにも理解がより深まる

新しいコーナーイメージ

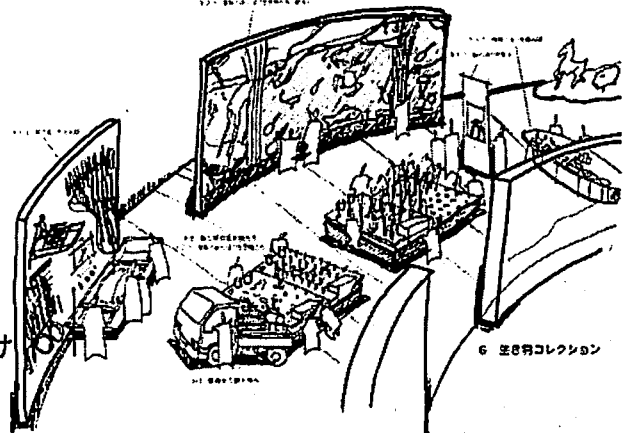


<ヨシ原を歩いてみると>

- ヨシ原の多様な生き物たちの生きている姿の展示や、ヨシ原の利用や保全活動などを紹介し、フィールドへ誘う
- ヨシ原や湖岸の変貌を紹介し、見慣れた景観を考えるきっかけを提示

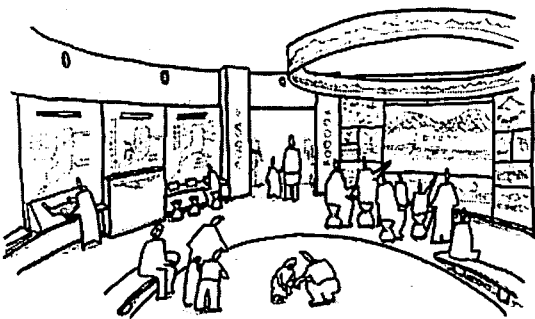
<田舟から軽トラへ>

- 滋賀の田んぼに暮らす生き物たち、田んぼをめぐる人びとの取り組みを紹介
- これからの田んぼや農業、食について考えるきっかけを提示するとともに、フィールドへ誘う



3. 田んぼをのぞいてみると

6. 軽トラコレクション



<これからの琵琶湖>

- 各地から集まるフィールド情報をリアルタイムに双方向でやりとりし、面白さを紹介、来館者をフィールドに誘う
- 様々な活動の発表の場、交流のきっかけづくりの場としてのコーナーを設置

④水族展示

<現状> 琵琶湖と周辺の魚類を中心とした生き物を生体で展示

<課題> 生き物と人とのかかわりや人間活動との関係性を分かりやすく提示していく必要がある。

<こう変わります> 琵琶湖の注目すべき魚の生態や行動を紹介

琵琶湖の生き物と、漁業、食文化など人との関わりを一緒にわかりやすく展示



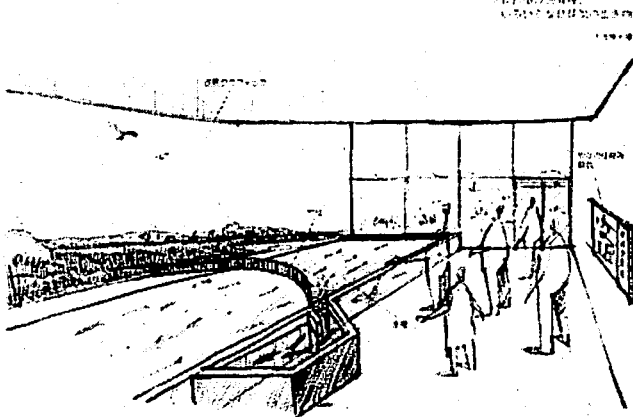
新テーマ:「琵琶湖地域のいま ~水中の生き物と私たち~」

琵琶湖の生き物の生き生きとした姿を通じて、琵琶湖への驚きや発見、親近感を呼び起こす
目に見えない小さな生き物から大きな生き物まで、琵琶湖の生物多様性を訴える
水族展示を通じて生き物と漁業や食文化など人の暮らしとのかかわりを発信する

新しいコーナーイメージ

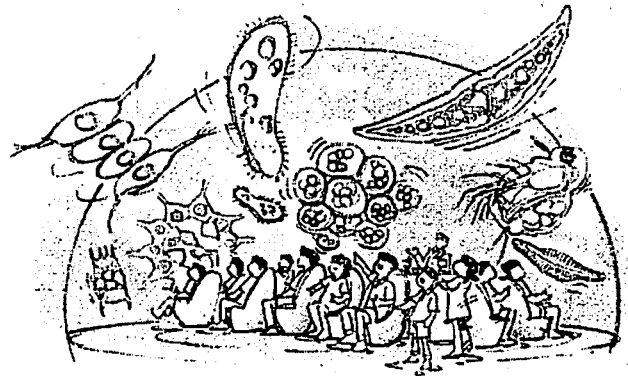
<琵琶湖に流れる川 ~下流域の魚と漁~>

○琵琶湖下流域を再現した水槽を設置し、アユ、オイカワなどの魚類を生体展示する。またヤナを設置して、それを見せようとするアユを見せる



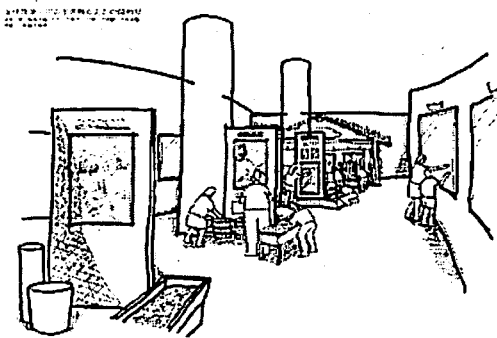
<マイクロアクアリウム>

○琵琶湖の生態系を支えるプランクトンなどの小さな生物をシアターや顕微鏡で紹介する



<琵琶湖の生き物と人との関わり>

○琵琶湖の固有種である魚が泳ぐ水槽とそれらをつかまえる漁法、料理を紹介



<古代湖の世界>

○日本唯一の古代湖としての琵琶湖の価値を発信するため、世界最古の湖であるバイカル湖やアフリカ地溝帯の湖など、古代湖の生き物、特に固有種(バイカルアザラシなど)を中心に比較紹介する



<姿を消しつつある魚と保護増殖センター>

○日本各地で減少している希少淡水魚の現状を紹介するとともに、国内随一の施設である保護増殖センターの機能を紹介します

2 交流空間・交流機能の再構築

<現状> 市民参加型の博物館として、はしかけ制度やフィールドレポーターなど先進的な取り組みが国内外から注目されてきた。観察会・体験教室・講座などを年間200回以上開催し、楽しみながら学び考え、出会いの場となる交流活動を活発に行ってきた。

<課題> ・大人が日常的に楽しめる魅力に欠ける
・湖畔の立地条件・屋外空間を十分に活かしていない
・制度参加者の固定化、多様化する来館者ニーズへの受け皿が不十分
・多人数の団体の屋内での受け入れ場所が不足

<こう変わります>

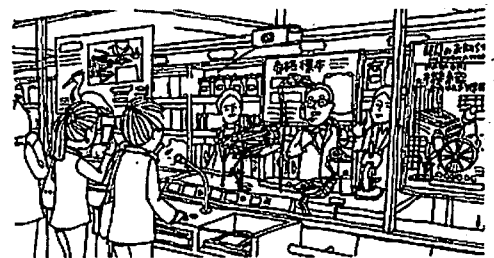
- ・大人も楽しめる仕掛け、プログラムを充実する
- ・樹冠トレイルにより、博物館から琵琶湖へ誘う
- ・だれでも博物館での活動に参加しやすい仕組みをつくる
- ・学校・一般団体向けの屋内の昼食場所を整備する

交流空間

<大人のディスカバリー>

～大人も遊べるリアルな知的空間～

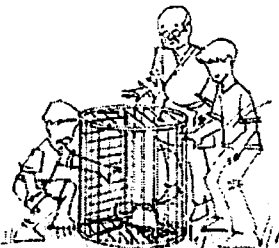
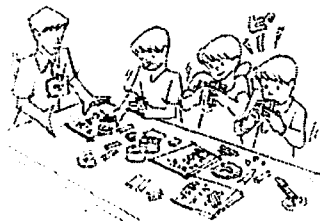
- 大人の興味や探究心に応え、新たな利用者層を呼び込み、繰り返し利用されるコーナー
- 本物の剥製に触れるなど、感覚で理解するハンズオン展示、自ら調べさらに知りたくなるきっかけをふんだんに設ける
- 博物館スタッフが、博物館の楽しさやいろいろな活動をその場で来館者に伝え、対話する交流



<ワクワク体験スペース>

～いつでも楽しく体験～

- いつ来ても、家族・カップル・シニア層などどんな人にも、時期折々に楽しめる多様なプログラムが体験できる
- はしかけ、フィールドレポーター、地域で活動している人たちが自らの具体的な体験・成果を伝え、来館者と直接顔を合わせた交流ができる



<レストラン・ショップのエンターテインメント機能強化>

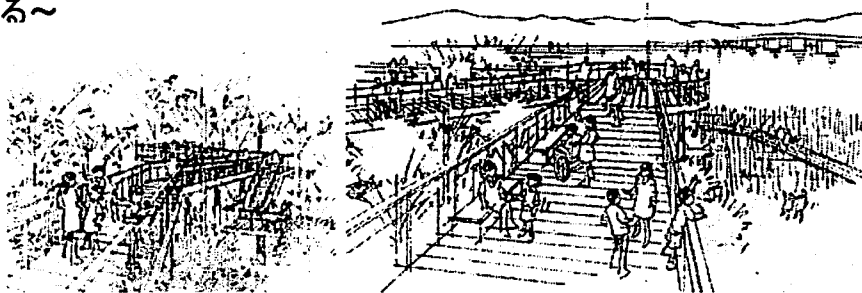
～美味しくつろぎ、楽しさお持ち帰り～

- 地元産食材や特産品を味わえるレストラン
- ここにしかないオリジナルグッズや書籍等、琵琶湖博物館ならではの品ぞろえのショップ

<樹冠トレイル>

～自然に近づき、琵琶湖を感じる～

- 琵琶湖を渡る風を感じながら、森を上から観察できる空中散歩道
- 琵琶湖が一望でき、琵琶湖との一体感を感じられる
- 記念撮影もできる展望台



交流・来館者サービスの向上

<環境学習センター>

- 環境学習や環境に関わる活動をしてみたい人が、何から始めたらよいか、気軽に相談できる窓口

<博物館活動室>

- はしかけ、フィールドレポーター、地域で活動している人たちの活動室

<学校・団体向け屋内スペース>

- 多人数の体験学習
- 昼食・休憩スペース
- 障がいのある方が使用できるUD対応の休息空間



だれでも利用しやすく、快適でスピーディーなICT(情報通信技術)環境の整備

- 博物館活動の案内、事業情報を収集、提供、活用できるようなシステムや利用環境を整備
- 館内で来館者が効率的に、楽しく情報を得られるシステムを整備
- フィールド情報を双方向にリアルタイムでやり取りできる環境を整備

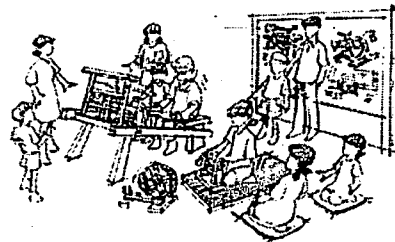
交流機能

<自らを発見する新たな参加と交流>

- 湖や博物館に興味がある、何か関わってみたい場合に、県内だけでなく関西などから来た人にもワンストップで対応
- リピートしたくなるプログラムや企画の開発
- 活動している人たちの顔が見え、来館者とだれもが参加できる交流を展開

<地域をつなぐ交流>

- 地域の人々による活動を他の人たちに伝え、広める場をつくる
- 地域と地域をつなげていくため、博物館と地域との連携をさらに強化する
- 地域のフィールド情報を得られるアプリや学習プログラム、標本貸出キットなど地域で使えるアイテムを開発
- 国際湖沼環境委員会(ILEC)などと連携して、資料・情報収集、研究、交流、展示の国際化、地域と海外の人的交流の促進



【企業連携と外部資金活用】

(1) 琵琶湖博物館の活動と企業のCSR(企業の社会的責任)活動とのかかわり

- 企業のCSR活動が活発化し、琵琶湖との共生、生物多様性保全などの活動に積極的に取り組み、琵琶湖博物館との連携が進んでいる。
- 今後、企業の琵琶湖博物館に対する期待とニーズがさらに高まる。

(2) 琵琶湖博物館の今後の企業連携・外部資金活用の方向性

- 企業との連携を博物館活動に明確に位置付けることにより、企業とともに「湖と人間」の共存関係を築く新たな活動を展開する。
- 琵琶湖博物館らしさを生かした新しい連携のあり方を企業に提示し、企業との共同研究・研究開発など活動の輪を広げ、協力関係を強化する。
- 企業のCSR活動等と連携し、リニューアルにかかる資金協力を得るとともに、琵琶湖博物館を拠点とした企業の環境保全活動・CSR活動の発信を行う。

【効果的な広報・営業活動の展開】

(1) 広報・集客活動の改善

- ①国内での認知度の向上
 - 〈現状〉 県内の認知度：90%以上 県外（京阪神・東海）の認知度：30%
 - マスメディアとの共催イベントの開催
 - ホームページの刷新、ユーチューブでの情報提供
 - ターゲット別認知度向上(無料情報紙とのタイアップ、ホテルや道の駅、サービスエリアでの周知等)
- ②海外での認知度の向上
 - 観光客、研究者に向け多言語ガイドブック作成、海外旅行業者との連携
- ③広報・営業スタッフの配置
 - 戦略的な広報・営業活動を展開するため、専門性の高いスタッフを配置
- ④料金体系の検討
 - 誘客につながる料金設定、割引制度の検討

(2) 他機関との連携

- ①博物館同士の連携
 - 他館との共同事業、セット回遊など地域での位置づけの確立
- ②ビズターズビューロー・旅行業者等との連携
 - キャンペーン・旅行プランの提案
- ③パートナーシップ協定
 - 企業・大学と連携し、会員制や単位認定等の利用制度を検討

(3) アクセシビリティ(アクセス、利用のしやすさ)の向上

- ①琵琶湖博物館情報へのアクセスの向上
 - SNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)を活用した多面的な情報提供、障害のある方へのUD情報の改善
- ②琵琶湖博物館へのアクセス(経路)の向上
 - 地元草津市、バス会社と連携した公共交通機関の増便
 - 湖岸に隣接する立地を生かした湖上交通によるアクセスの向上
- ③館内アクセスの向上
 - タブレット等を活用した館内や展示案内、多言語情報サービスの提供

【施設整備】

利用者の視点に立った施設整備を行うため、広く利用者の意見を聴き、安全・安心、サービスの向上を目指し、また博物館機能を充実する施設設備の再構築を行う。

(1) ユニバーサルデザインの推進

○多様な人が訪れる施設として、だれもが能力を最大限に生かして楽しめるようユニバーサルデザインの考え方に基づく施設づくりを一層推進する。

(2) 効率的な維持管理のための施設整備

○予防的な維持保全により施設・設備の長寿命化を図り、施設を有効活用して維持保全費用を削減するため、ストックマネジメントの考え方を導入し、施設長寿命化計画を作成する。

【新琵琶湖博物館創造 検討経過】

広く県民、利用者、有識者の意見を聴きながらリニューアルの検討を進めている。

(1) 滋賀県立琵琶湖博物館協議会での審議

○博物館法に基づき設置されている琵琶湖博物館協議会において検討。

〈平成24年度〉 平成24年10月30日 ・ 平成25年2月5日

〈平成25年度〉 平成25年11月6日

(2) 県民ワークショップの開催

○学校、企業の関係者と、琵琶湖博物館の活用について情報交換を行った。

①「学校と琵琶湖博物館」平成24年11月25日 参加者：大学生、大学関係者等

②「企業と琵琶湖博物館」平成25年2月7日 参加者：企業15社等41名

(3) ピアレビュー(有識者意見聴取)の開催

○有識者より、琵琶湖博物館の課題、リニューアルへの提案等について意見を聴取した。

- | | |
|--------------------------|-------------|
| ① 国際化、UDについて | 平成24年11月6日 |
| ② 当館展示、基礎機能に対する評価、今後の展開等 | 平成24年11月29日 |
| ③ 当館に対する評価、広報戦略等 | 平成24年12月19日 |
| ④ 当館、ビジョンに対する評価、提案等 | 平成25年3月14日 |
| ⑤ 評価システム等 | 平成25年3月29日 |
| ⑥ 当館、ビジョンに対する評価、提案、交流制度等 | 平成25年3月30日 |

(4) 新琵琶湖博物館創造基本計画検討会議の開催

○有識者による、専門的・具体的検討のための検討会議の開催

- | | | |
|--------|-----------------|-----------------|
| ①第1回 | 日時：平成25年6月20日 | ビジョンと基本計画策定に向けて |
| ②第2回 | 日時：平成25年8月1日・7日 | 現地視察、現状の議論 |
| ③第2-2回 | 日時：平成25年8月11日 | ICTについて |
| ④第3回 | 日時：平成25年9月13日 | 中間とりまとめに向けた検討 |

(5) アンケート・意見聴取の実施

○来館者アンケートや企業、大学生等にリニューアルに関するアンケートを実施。

○インターネットアンケート(600サンプル、県内および京阪神、東海)を行い、利用者・非利用者の傾向、認知度等を調査した。

○広報アドバイザー、旅行社等から意見を聴取した。